

# 仏女新聞

仏女新聞社 飯島可琳

仏女新聞三月号です。修二会が終わると本当に春が来たようです。写真は東大寺二月堂で行われた修二会の「大中臣祓」という儀式の様子です。僧侶が袈裟のかけ替えて神職に変身するところや、横綱の土俵入りのように手を広げながら、大股で横に



動くところが面白いのでおすすめですが、本行が始まる前、二月の末日に行われるので見逃さないように注意して下さい。

興福寺 文殊菩薩・維摩居士

文殊菩薩



維摩居士

維摩居士と文殊菩薩

奈良国立博物館研究員の

岩井さんに話を聞きました

維摩居士(ゆいまこじ)は仏ではなく、お金持ちの人間でした。仏教を深く理解している理想的な人だったそうです。

ある時、維摩居士は病気にかかってしまいました。お釈迦様は弟子達にお見舞いにいくように言うのですが、弟子は以前に維摩居士に問答でこてんぱんに負けたことがあるので、誰もお見舞いに行くといいません。そこで、知恵のある文殊菩薩がお見舞いに行くことになりました。二人の問答の様子を表したのがこの二つの像です。

岩井さんの一言

「鎌倉時代の仏像はリアルなだけでなく、『ドラマチック』な仏像だ。」



顔のあちこちにしわができて病弱に見える維摩居士と、顔に張りがある文殊菩薩はずいぶん印象が違う。そもそも、正反対の人が対になっていることに意味をこめてつくったのかもしれない。維摩居士の厳しい目つきは、病の苦しみを隠そうとして

顔に力を入れているようにも見え、問答に真剣に向き合っているようにも見え。違いばかり見ていると、どうして正反対の二人の釣り合いが取れているのかは分からない。似ているところを見つけたら、この二人にしか出せない雰囲気がかつてくるのではないだろうか。

私は鎌倉時代の仏像がドラマチックだという意見に納得した。「リアル」というのは写実的ということの意味する。絵の場合、普段見ている景色が写真のように描かれていたら誰もが驚くだろう。しかし、「仏」は誰もが見ることでできるわけではない。經典や過去の仏像などを参考にしたり、想像したりしてつくるしかない。つまり、本当の意味で仏像をリアルにつくるのは不可能なのだ。だからこそ、動いているかのよう

に衣の流れをつけたり、表情をゆたかに表したりという工夫をするのだ。動きは一瞬だが、その前後の形を想像させてくれる。そうすると、周りの様子も

含めて動きが理解できるわけである。だから「ドラマチック」なのかもしれない。

東金堂に安置されている維摩居士の後ろを見てみてほしい。武器を持って、ポーズを決めている十二神将がちらりと見えるだろう。まるでかくれんぼをしているかのようだ。十二神将には干支が割り振られている。諸説あるが、維摩居士のすぐ後ろにいるのは今年の干支である未年の頰彌羅大将だ。十二神将はポーズだけでなく、表情も個性的だ。十二神将の小さい体の中に、本尊を守る強い力を持っていると考えると、人間は小さいなと思えてくる。

興福寺では四月二十五日に文殊会が行われます。東金堂の文殊菩薩が主役の行事です。稚児行列も華やかなので、是非行ってみて下さい。



(維摩居士の写真は興福寺から使用許可をいただいています。)